『東京大学言語学論集』30 (2010.9) 195-214

トートロジーの主観性の源泉でないもの

酒井 智宏

キーワード: トートロジー、主観性、情報量

要旨

この論文の目的は主観性に基づくトートロジーの分析(主観性仮説)を解体することである。主観性仮説は、(i) 一般に文が表す主観性はその文が持つ情報量に反比例する、(ii) トートロジーは情報量がゼロである、という二つのテーゼからなり、(i-ii)によりトートロジーが豊かな主観性を表すという事実を説明しようとする。このうちテーゼ(i)を取り上げ、それがさまざまな言語学的・哲学的難問を引き起こし、そうした難問を回避するべく(i)を修正していくと、結局、主観性仮説自体が解消されてしまうことを示す。

1. 本論文の目的

本論文で扱う「トートロジー」とはX ÊTRE X (「X は X だ」)という形式の文を指す[1]。トートロジー(およびその否定である矛盾文)はしばしば強い主観性を表すことが知られている[2]。例えば、髭・川島・渡邊 (2009: 132)はフランス語のトートロジー(1a)が(1b)の含意を伝達すると述べている。

(1) a. Un homme est un homme. (「男は男だ。」)

b. Les hommes sont tous pareils. (男はみんな似たり寄ったりだ。)

(1b)は中立的な情報ではなく、男性全般についての低い評価を表している。(1a)の文に主観的判断を表す語が見当たらないのに、(1a)が(1b)のような主観性を帯びるのはなぜか。この問いに答えることがトートロジー研究の一つの課題となる。この問いに関して、近年、阿部 (2006a-b, 2007, 2008a-c, 2009)、Abe (2009)が「(1a)は情報量がゼロであるがゆえに主観性で満たされる」とする考え方を提示している。これによると、トートロジーとは、情報量をあえて空にすることで、主観性を表す手段であることになる。以下ではこの考え方を「主観性仮説」と呼ぶことにする。これまでのところ、主観性仮説を積極的に支持する研究者はいないが、それでも、日本のフランス語学界を中心に、直観的には納得できる学説であると考える研究者がおり、阿部もこの仮説をことあるごとに発表し続けている。

この論文の目的は、トートロジーに関する主観性仮説を徹底的に批判すること、それも願わくは「二度とその学説を口にする気が起きないほどに徹底して、完全に、いかなる言い

---

[1] 論理学では「トートロジー」という用語が恒真命題 (= 世界の状況とは無関係に常に真となる命題)を指すために用いられるが、本論文でいうトートロジーとは、恒真命題ではなく、あくまでもX ÊTRE X (「X は X だ」)という形式を持つ自然言語の文のことである。この呼称の区別は以下の議論にとって決定的な重要性を持つので十分な注意が必要である。

[2] 古くは三宅 (1972)が英語のトートロジーに関してこの事実を指摘している。

逃れも許さないように、その学説を破壊すること」[3]である。それにより、トートロジーが帯びる主観性の源泉を情報量の欠如に求めたくなる誘惑を永久に断ち切ることを目指す。

2. 方法論

言語学ではいまだに「理論は事実によって反証される」というポパー流の素朴な反証主義が採られることがあり、新たな言語事実の発見に高い価値が置かれる。例えば認知言語学の代表的な概説書である山梨 (1995)はその「まえがき」において「一見、周辺的で例外的と考えられる事例が、ある理論的な前提にたつ言語理論を根底からくつがえしてしまう場合もある」と述べている。しかし、本当にそのようなことがあるのだろうか。山梨は具体例を挙げていないが、言語学史上そのような事例があったかどうかは疑わしい。言語学は若い学問であり、標準理論に相当するものは確立されていない。それどころか、いかなる事実が理論化に値するかについての合意さえない。こうした状況で、一つの理論が特定の言語事実の発見によって決定的にくつがえされることがあるとは信じがたい。これは科学哲学における決定実験の不可能性の問題と類比的である。ある理論 T を検証するための実験には、たとえ実験者自身が意識していなくても、T 以外に無数の補助仮定 P1, P2, ...Pn が置かれる必要がある。仮に理論 T と整合しない実験結果 R が得られたとしても、そこから分かるのは、「T, P1, P2, ...Pn のうち、いずれかが間違っている」ということだけであり、実験結果 R のみから T が誤りであることを示すことはできない。これが決定実験の不可能性である[4]。このとき、補助仮定 P1, P2, ...Pn のうち一つないし複数を別の補助仮定に置き換えて実験結果 R との整合性を確保することで理論 T を無傷なまま維持することができる[5]。言語学においては補助仮定の取捨選択に関する合意は期待できないから、決定実験は成立しないと言える。

これを踏まえると、トートロジーに関する主観性仮説を正面から反証することは断念せざるを得ない。そこで、以下では、主観性仮説に対する反証となりそうな議論を提示しつつ、それらから主観性仮説を守り抜くにはどうすればよいかを考える。そして、主観性仮説を守り抜こうと努力する限り次々と無理難題が降りかかり、そこから逃れようとすると今度は肝心の主観性仮説の方が解消されてしまうことを示す。

3. 主観性仮説

第 1 節で述べたように、阿部 (2006a-b, 2007, 2008a-c, 2009)、Abe (2009)の主観性仮説とは、トートロジーは情報量がゼロであるがゆえに豊かな主観性を表すという仮説である。この仮説は二つのテーゼから構成される。一つは次のものである[6]。

---

[3] 鬼界彰夫 (2003) 『ウィトゲンシュタインはこう考えた—哲学的思考の全軌跡 1912-1951』(講談社現代新書)、p.313.

[4] 決定実験の不可能性に関する簡潔な解説としては例えば戸田山 (2005: 181-189)を参照。

[5] 山口 (2009: 13 注[3])が述べるように、学部一年生が授業で行う実験で「理論を否定する結果」が出ても、それによって理論が反証されることなどありえず、理論が予測するとおりの結果が出るまでやり直しをさせられるだけのことである。その「やり直し」には、理論以外の実験の条件をもう一度チェックするという作業が含まれるであろう。このことはまさに、実験に暗黙の補助仮定が含まれるという事実を物語っている。

[6] (2)は阿部のオリジナルの表現ではなく、阿部の一連の議論から読み取れる理論的前提を

(2) 文が持つ情報の量が減少すればするほど、文が表す主観性の程度は増大する。

もう一つは「トートロジーの情報量はゼロである」というものである。これら二つの組み合わせにより、トートロジー(3a)だけでなく、その否定である矛盾文(3b)、さらに省略文(3c)も同様に主観性を表すという事実が説明できるとされる[7]。

(3) a. Un homme est un homme. (= (1a)) (「男は男だ。」)

b. Un homme n'est pas un homme s'il ne sait pas danser. (Web)

(「踊れない男は男ではない。」)

c. Une fleur ! (「花 !」) (Abe 2009)

主観性仮説によると、(3a-b)が豊かな主観性を表すのはこれらの文の情報量がゼロだからであり、(3c)が豊かな主観性を表すのはこの文の情報量が最小だからである。また、トートロジー・矛盾文・省略文が通言語的に観察されるのは、テーゼ(2)が普遍的であるためだとされる。

以下では、主観性仮説を構成する二つのテーゼのうち(2)を取り上げ、それが数々のパズルを引き起こすことを論じる。そうしたパズルが生じてしまうのは、(2)における「情報の量」の規定と「主観性の程度」の規定のいずれにも大きな欠陥があるためである。

4. 「情報量」をめぐる問題

主観性仮説のテーゼ(2)が検証可能であるためには、「文が持つ情報の量」と「文が表す主観性の程度」が独立に測定可能でなければならない。情報量を増大させたのに主観性が減少しなかったり、情報量を減少させたのに主観性が増大しかなったりすれば、(2)は反証される。逆に、そのようなことが起きなければ、(2)は検証ないし確証されたことになる。しかし、阿部は「文が持つ情報の量」と「文が表す主観性の程度」の測定方法をまったく示してい

簡潔にまとめたものである。これに対して、大阪大学の井元秀剛氏 (個人談話)より、主観性仮説が前提とするのは(2)ではなく単に(i)ではないかという趣旨の指摘を受けた。

(i) 文が持つ情報量がゼロのとき、文はもっぱら主観性を表す。

すなわち、井元による主観性仮説の解釈では、情報量と主観性の間に成り立つのは、(2)のような反比例関係ではなく、(i)のような二者択一関係であるということである。しかしながら、この指摘は二つの理由により却下できる。第一に、阿部 (2009)および Abe (2009)の次の記述は、阿部が一般的に妥当すると考えているのが(i)ではなく(2)であることを示唆している。

(ii) 「これらいずれにも共通するのは、情報をゼロあるいは減じることにより、それに反比例して主観性が際立ってくる、というメカニズムであり、これらもまた主観性表出のための方策である、と考えられる。」(阿部 2009)

(iii) « Dans le cas de l'ellipse tout comme dans celui de la phrase non-sens, il peut être à supposer un certain mécanisme selon lequel l'intervention de la subjectivité est inversement proportionnelle à la quantité informative de la phrase. La première augmente dans la mesure où diminue la dernière. » (Abe 2009)

第二に、上の(iii)に見られるように、阿部はトートロジーだけでなくいわゆる省略文も主観性仮説の射程に収めようとしている。省略文は恒真命題ではなく、その情報量はゼロではありえないから、(i)ではこれをカバーすることができない。したがって、阿部自身の発言がどうあれ、主観性仮説の内的要請により、仮定されるのは(i)ではなく、あくまでも(2)でなければならないのである。

[7] 以下、フランス語の例文には拙訳を付ける。

ない。ただ単に「トートロジーは情報量がゼロであるがゆえに豊かな主観性を表す」と繰り返すだけである。そこでまずトートロジーの情報量がゼロであるとはどういうことかが問題にされなければならない。これはトートロジーが論理的恒真命題を表すということであろう。論理的恒真命題は現実世界について何も語らず、世界のあり方とは無関係に真となる。ゆえに、トートロジーが論理的恒真命題を表すとすると、トートロジーは情報量を持たないことになる。この意味でトートロジーの情報量がゼロであることは認めることにしよう[8]。この仮定のもとでも、主観性仮説は途方もない問題を引き起こす。

4.1 省略文の情報量

Wittgenstein (1922: 4.46-4.4661)は、現在でも広く受け入れられている命題の三分類を行っている。それをまとめると次のようになる。

(4)　a. 恒真命題: 真でしかありえない、無意味
　　b. 矛盾命題 (= 恒真命題の否定): 偽でしかありえない、無意味
　　c. (通常の)命題: 真でも偽でもありうる、有意味

恒真命題と矛盾命題が無意味とされるのは、これらが真偽両方の可能性を持たず、世界について何も語らないからである。

阿部の「トートロジーは情報量ゼロ」「矛盾文は情報量ゼロ」という見解は、ウィトゲンシュタインの三分類を前提にしたうえで、「トートロジーは恒真命題を表す」「矛盾文は矛盾命題を表す」と考えれば、一応整合的に解釈することができる[9]。真でしかありえない命題と偽でしかありえない命題は世界について何も語らないという点で情報量ゼロであり、経験的に真偽が決まる命題のみが一定の情報量を持つのである[10]。

問題は省略文の情報量である。省略文(3c)は名詞のみから成り立っており、それ自体では命題を表していない。命題でない以上、(4)の三分類のどこにも位置づけられない。一般に情報量の多寡を問えるのは命題のみである。モノとコトの区別で言えば、情報量を問題にできるのはコトのみである。「君の言っていることはあまり内容がない」とは言えるが、「君の花はあまり内容がない」では何のことやら分からない。省略文(3c)がモノを表す名詞のみからなる以上、「省略文の情報量」という言い方自体がカテゴリー誤謬を犯しており、

---

[8] 実際には、トートロジーが恒真命題を表すという想定自体が誤りであることを証明することができる(Sakai 2009)。トートロジーが恒真命題を表さないならば、主観性仮説の「トートロジーは情報量がゼロであるがゆえに豊かな主観性を表す」という主張は無効となる。しかしながら、以下ではトートロジーが恒真命題を表すという想定が正しいと仮定し、この譲歩のもとでも多くの問題が生じることを示す。

[9] ただし矛盾文が引き起こす問題については次節で論じる。

[10] ここでの議論には直接関係しないが、Wittgenstein (1922)は有意味でない命題を二つに区別している。一つは、表現の論理形式を逸脱し、命題としての体裁を為していないものである。野矢 (2002/2006: 122[ページ番号は野矢 (2006)による])の例では「あのほらけ」「白いは重い」「ウィトゲンシュタインは2で割り切れる」などがこれに相当する。こうした命題もどきはナンセンス unsinnig と呼ばれる。もう一つは恒真命題と矛盾命題であり、これらは論理形式を逸脱しておらず、命題としての体裁を為しているが、世界については何も語らない。恒真命題と矛盾命題は無意味 sinnlos と呼ばれる。阿部はしばしば後者を「ナンセンス」と呼ぶので注意を要する。

ナンセンスである[11]。

では、「省略文の情報量は最小である」というナンセンスであるはずの言明が何となく理解できてしまうのはなぜだろうか。これは、阿部が「省略文の情報量は最小である」と言うとき、実際に言われているのがどんなことであるかを考えればおのずと見えてくる。おそらく「省略文の情報量は最小である」ということで言われているのは「省略文は通常の文よりも少ない数の単語でできている」ということであろう。「花がきれいだ」よりも「花!」の方が単語数が少ない。これこそが「省略文は情報量が最小である」といった言明の正体であると思われる。そしてそれこそが、このナンセンスであるはずの言明が何となく理解できてしまう原因である。だとすると、ここには致命的な誤謬がある。文を成り立たせる単語の数がいくつであるかは形態論的・統語論的事実である。それに対して、文の情報量は意味論的事実である。主観性仮説は、意味論的事実を形態論的・統語論的事実により定義するという誤謬の上に成り立つ仮説なのである。したがって、あくまでも主観性仮説を維持しようとするなら、モノにもコトにも適用することができる統一的な情報量の測定基準を作る必要がある。それができないなら、主観性仮説は単なる誤謬として片付けられるべき代物に過ぎなくなる。

これに対して、次のような反論が考えられるかもしれない。すなわち、(3c)は、一見命題を表さないように見えるが、実際には、Recanati (2004)の言う自由拡充 (free enrichment) ないしそれに類する操作により、(5)のような命題を表すのだ、という反論である。

(5) Il y a une fleur là-bas ! (「あそこに花がある!」)

しかしながら、この反論はテーゼ(2)を救済することはできない。これは二つの観点から示すことができる。第一に、(3c)が(5)が表すような命題を表すとすると、(3c)の情報量が最小であるという大前提が崩れ、(3c)が豊かな主観性を表すとは言えなくなる。(3c)が(5)を表すとき、(3c)の情報量が最小でないことは次の事実によって確認できる。第一に、あるものの存在を表す(3c)のような文は、滝浦 (2005: 142)が言うように「真実の事柄のみを過不足なく直裁かつ明瞭に伝える」文である。これは「火事! (Au feu!)」という発話を考えれば明らかである。こうした発話は「情報量ゼロで、豊かな主観性を表す」などといったのんきなものではない。話者は、こうした発話によって、火事が起き、身の危険が迫っているという重大な情報を仲間に知らせているのである。その意味で、省略文はむしろ情報量最大の発話と言うべきであろう。第二に、Carston (2004: 641)が指摘するように、(3c)のような省略文で嘘がつけるという事実も見逃せない。花に関して嘘をついたくらいでは大したことにはならないかもしれないが、火事が起きていないのに「火事!」と言う人間は社会的地位を失う。省略文によってそれほど重大な嘘がつけるという事実は、省略文の情報量が決して小さく

[11] Une fleur (「花」)の指示対象としてモノ以外を割り当てる理論も考えられる。例えば、「fleur であるものの集合」、「fleur であるものを真に、そうでないものを偽に写像する関数」、「ラッセル流の命題関数 x est une fleur (変項 x に値を割り当てることにより命題が得られる)」などである。いずれにしても、une fleur が単独で命題と結び付けられることはない。そんなことをすれば *Je crois qu'une fleur. (英語: I believe that a flower.)などが正常な文として認められてしまうことになる。なお、特殊なメカニズムにより、(3c)のような省略文の場合に限って une fleur を命題に結びつけることは不可能ではないだろうが、この考え方は別の困難を引き起こす。これについてはすぐ後で論じる。

ないということを明瞭に物語っている。これは恒真命題によって嘘をつくことができないのと対照的である。(3a)が表すとされる恒真命題「すべての男は男である」は偽ではありえず、(3a)を用いて嘘をつくことはできない。この点で、(3a)と(3c)の情報量がともにゼロないし最小であることを前提とする主観性仮説を維持するためには、「情報量」に関するきわめて奇怪な理論が要請されることになる。

第二に、(3c)が(5)を表すという想定は、言語表現の字義通りの意味が実際の意味と異なる可能性を認めているに等しい。(3)は一見モノを表す発話に見えるが、実際には命題(5)を表す、といったことをいったん認めてしまうと、主観性仮説が拠って立つ「トートロジーは恒真命題を表す」という想定も無傷ではいられなくなる。すなわち、トートロジー(3a = 1a)は恒真命題など経ずに直接的に主観的判断(1b)を表すという可能性が生じるのである。(1a)が恒真命題を表さないとすると、(1a)の無意味性と主観性との間に相関関係を見出そうとしていたテーゼ(2)は空転せざるを得ない。そこで、(2)を維持したければ、(3c)が見かけと異なる意味を持つのに対して、(1a)は見かけどおり恒真命題を表すということを正当化する必要が生じる。

以上の議論から、主観性仮説のテーゼ(2)を維持するためには、次のことが必要であることが分かる。(i) 省略文(3c)が文字通りモノを表すのだとすると、モノとコト(命題)の両方に適用可能な統一的な情報量の測定方法を作り、その統一基準に基づいて(3a)と(3c)がともに情報量最小だと言えるようにする必要がある。(ii) 省略文(3c)が見かけに反して実は(5)が表すような命題を表すのだとすると、(5)や「火事だ!」のような文の情報量が最小であると言えるような情報量の理論を作り、かつ、省略文が見かけと異なる意味を表すのに対して、トートロジーは見かけどおり恒真命題を表すということを論証する必要がある。それができないなら、主観性仮説のテーゼ(2)は定義不能な「情報量」なる概念を用いたナンセンスな言明に転落する。

4.2 矛盾文の情報量

阿部によると、矛盾文(3b)はトートロジー(3a)と同様に情報量がゼロであり、テーゼ(2)により、豊かな主観性を表すとされる。(3b)は踊れない男性に対する低い評価を表しており、(3b)が豊かな主観性を表すという点に異論の余地はない。問題は、(3b)の情報量がゼロであるという想定である。本当に矛盾文はトートロジーと同じく情報量ゼロなのだろうか。これについてはウィトゲンシュタインが正反対の考えを述べている。

(6) 「おそらく、最も多くのことを帰結させる命題が最も多く語る、と語ることができよう。[...] だがどうだ！それでは矛盾が最も多く語る命題ではないのか。[...]」(Wittgenstein 1961: 1915 年 6 月 3 日付草稿)

これによると、矛盾命題は情報量が最大ということになる。(6)の説明は後回しにして、仮に(6)が正しく、矛盾命題の情報量が最大だとすると、主観性仮説が崩れることを確認しておこう。情報量が最大ということは、(2)により、主観性が最小だということである。したがって、(6)が正しいなら、トートロジー(3a)は主観性最大、矛盾文(3b)は主観性最小の文であるということになる。しかし、これは(3b)が踊れない男性に対する低い評価を表すという事実と矛盾する。このことから、(6)が正しければ主観性仮説が事実に関して誤った予測をすることが分かる。

では、なぜ(6)が言えるのかを説明しよう。次の(7a)と(7b)の関係を考えると、(7a)が真ならば(7b)も必ず真であることが分かる。すなわち、(7a)は(7b)を含意する。

(7) a. Jacques est venu et Louis est parti. (「ジャックが来て、ルイが去った。」)

b. Louis est parti. (「ルイが去った。」)

これは(7a)の情報にすでに(7b)の情報が含まれていることによる。すなわち、(7a)は(7b)より情報量が大きいということである。ここから一般に(8)が成り立つ[12]。

(8) 命題 p は命題 q を含意する。⇔ p は q より大きな情報量を持つ。

また、このとき、p の真理条件(真であるための条件)は q の真理条件を含んでいる。(7)を例に取ると、(7a)の真理条件は「ジャックが来た」が成り立ちかつ「ルイが去った」が成り立つことであり、(7b)の真理条件は「ルイが去った」が成り立つことである。この事実と(8)を合わせると、(9)が言える。

(9) 命題 p の真理条件は命題 q の真理条件を含む。

⇔ p は q より大きな情報量を持つ。

ここで恒真命題の真理条件を考えると、恒真命題は常に真であるから、いかなる真理条件も課さないことが分かる。このため、恒真命題の真理条件は他のいかなる命題の真理条件にも含まれる。ゆえに、(9)より、恒真命題の情報量は最小となる。問題は、恒真命題の否定である矛盾命題の真理条件である。矛盾命題はいかなる場合にも決して真になることはない。ここから、矛盾命題の真理条件は充足不可能なほど厳しいと解釈することができる。矛盾命題が課す真理条件は厳しすぎて世界において決して満たされることがないのである。こうして、矛盾命題の真理条件は他のすべての命題の真理条件を含むことになる。ゆえに、(9)により、矛盾命題は情報量が最大となる。さらに(8)により、矛盾命題は他のすべての命題を含意する。これこそが(6)で言われていることである[13]。恒真命題と矛盾命題では情報量が正反対なのである。こうして、(2)によると、矛盾命題を表す矛盾文(3b)は主観性最小の文と結論せざるを得ず、言語事実と矛盾をきたすことになる。

同様の問題は矛盾文以外に関しても生じる。(10a)は(10b)を含意するから、(8)より、(10a)の方が(10b)より情報量が大きい。

(10) a. Pierre et Paul sont méchants.「ピエールとポールは性格が悪い。」

---

12 これはウィトゲンシュタインが(i)で言おうとしたことと同じであると思われる。

(i) 「[...]p は q から帰結するが、q は p から帰結しない場合、q は p より多くを語る。こうではないのか。[...]」(Wittgenstein 1961: 1915 年 6 月 3 日付草稿)

13 ただし、野矢 (2002/2006: 126[ページ番号は野矢 (2006)による])の指摘によれば、Wittgenstein (1922)において提示されている体系は、矛盾命題からいかなる命題も帰結させないものとなっており、この点で現代標準的な論理体系と異なっている。野矢が注目するのはウィトゲンシュタインの次の発言である。

(i) 「とくに、命題「q」の真理根拠のすべてが命題「p」の真理根拠である場合、「p」が真であることは「q」が真であることから帰結する。」(Wittgenstein 1922: 5.12)

ここで「p が q から帰結する」ではなく「『p』が真であることは『q』が真であることから帰結する」と言われていることに注意しなければならない。真ではありえない命題からは何も帰結しないのである。実際、ウィトゲンシュタインは(6)に引用した箇所の後で次のように述べている。

(ii) 「[...]しかし矛盾がまさに矛盾であるが故に、私は矛盾からは何も推論できないのである! [...]」(Wittgenstein 1961: 1915 年 6 月 3 日付草稿)

b. Pierre est méchant.「ピエールは性格が悪い。」

ゆえに、(2)によると、(10b)の方が(10a)より豊かな主観性を表すことになる。しかし、これは明らかに事実に反する。(10b)がピエールのみに関する評価を表す文であるのに対して、(10a)はそれに加えてポールに関する評価も行っている。それなのに(10b)の方が豊かな主観性を表すというのは意味不明である。

(2)を堅持し、かつこうした問題を回避するには、(8-9)を反証するしかない。しかし、これは「情報量」という用語に特殊な定義を与えない限り不可能であろう。仮に(8-9)を認めるならば、残された道は一つしかない。それは(2)を修正し、恒真命題と矛盾命題がどちらも豊かな主観性を表せるようにし、かつ(10)のような通常の命題(4c)を表す文は(2)の適用対象外とすることである。では、恒真命題と矛盾命題の共通点は何であろうか。この問いに対してはウィトゲンシュタインの発言(11-12)が答えを与えている。

(11)　「[恒真命題]は、現実がありうる位置として論理空間の全体を—無限に—許容する。[矛盾命題]は、論理空間全体を埋め尽くし、現実に場所を与えない。かくして、どちらも現実を規定するすべをいっさい失う。」

(Wittgenstein 1922: 4.463)

(12)　「[恒真命題]は無条件に真であり、それゆえ真理条件をもたない。そして、[矛盾命題]は真となる条件をまったくもたない。

[恒真命題]と[矛盾命題]は無意味である。」(Wittgenstein 1922: 4.461)

すなわち、恒真命題も矛盾命題も、現実を規定しないという点で無意味なのである。これを踏まえて(2)を修正すると(13)のようになるだろう。

(13) 現実を規定しないという点で無意味な命題を表す文は豊かな主観性を表す。

しかし、(2)を(13)のように修正することは主観性仮説の射程を著しく狭めることになる。なぜなら、(2)では文の持つ情報量と文の表す主観性との間の反比例関係というきわめて一般性の高い法則性が主張されていたのに対して、(13)ではこの一般性は失われ、もっぱら恒真命題と矛盾命題を表す文にしか適用されない法則になってしまっているからである。これは法則というよりトートロジーと矛盾文に関する記述的一般化に過ぎない。ところが、(2)を(13)のように修正してもなお困ったことが起きるのである。それを次節で見ることにしよう。

4.3 恒真命題と矛盾命題は豊かな主観性を表すか?

改定案(13)によると、現実を規定しないという点で無意味な命題は豊かな主観性を表す。しかし、これは明らかに成り立たない。次の(14)はいずれも恒真命題を表す文であり、(15)はいずれも矛盾命題を表す文である。(13)が正しければ、(14)と(15)はいずれも最大の主観性を表すことになってしまう。

(14)　a. Un chat est un chat.(「猫は猫だ。」)

b. Un chat est un chat ou un chien.(「猫は猫であるか犬であるかだ。」)

c. Un chien qui n'est pas un chat est un chien ou un chat.

(「猫でない犬は犬であるか猫であるかだ。」)

d. Si un chat n'est pas un chat, un chat est un chat.

(「猫は猫でなければ猫だ。」)

(15) a. Un chat n'est pas un chat s'il n'attrape pas de souris.
(「猫はねずみを捕らなければ猫ではない。」)
b. Un chat est une maison et n'est pas un chat s'il n'attrape pas de souris.
(猫はねずみを捕らなければ家であって猫ではない。)
c. Un chat qui est un chien n'est pas un chien. (「犬である猫は犬ではない。」)
d. Si un chat est un chat, un chat n'est pas un chat.
(「猫が猫であるならば、猫は猫ではない。」)

しかし、(14-15)のうち、まともに使えるのは(14a)と(15a)だけであり、他はほとんど話にならない。これらの文は、主観性を表す以前に、そもそも使い道がない。

これに対して、井元秀剛氏 (個人談話)は、(14b-d)や(15b-d)も、仮に発話されれば、(13)のような原則に従って主観性を表すのだと言う。理屈は単純で、「文の意味 = 客観的な部分 + 主観的な部分」であるから、(13b-d)や(14b-d)では客観的な意味がゼロである以上、これらの文は主観的な内容を表すしかなく、その点で(13)は正しいのだと言う。しかし、この反論は空虚なものでしかない。(14b-d)(15b-d)が表す主観性はどんなものだろうか。(13)は言語的意味と主観性の間の相関を述べる法則であるから、(13)が正しければ無意味な命題を表す文は必ず主観的な内容を表すはずである。(13a)や(14a)が猫に関する主観的判断を伝達するように、(13b-d)や(14b-d)も、仮にこれらの文が使われたとすると、必ず何らかの主観的判断を伝達するはずである。しかし、これらの文が伝達する判断はせいぜい「話し手は頭がどうかしている」といったものでしかないであろう。これを主観性と呼ぶかどうかは理論が決定するべきことであるが、以下で見るように、いずれの決定のもとでも問題が生じる。

まず、「話し手は頭がどうかしている」という判断を(13)の言う主観性に含めてみよう。すると、これは(13a)や(14a)が伝達する主観性とはまったく質の異なる主観性となる。(13a-14a)はそれぞれ X ÊTRE X / X n'est pas X という形式の文の構成要素 X が指すもの(ここでは猫)に関する主観的判断を表している。しかし、「話し手は頭がどうかしている」といった判断は文の構成要素とまったく無関係である。この事実は二つの問題を引き起こす。第一に、こうした雑多なものをまとめて「主観性」と呼ぶことは、(12)が述べる主観性なる概念を意味不明なものにしてしまう。ここで仮定されているのは「文の主観的意味 = 『文の意味 = 客観的な部分 + 主観的な部分』において、客観的な部分を取り除いたもの」という消去法的定義である。仮に「客観的部分」なるものが明確に定義できたとしても、このようにして定義される主観的意味の範囲は膨大なものとなるだろう[14]。このような寄せ集

[14] 実際には、「客観的部分」を明確に定義することも困難である。(i)を考えてみよう。
(i) Il regrette qu'elle ne soit pas venue. (「彼は彼女が来なかったことを残念に思っている。」)
この文が表す命題は次の二つの事実を含んでいる。
(ii) Il regrette. (「彼は残念に思っている」)
(iii) Elle n'est pas venue. (「彼女は来なかった。」)
(iii)が客観的部分なのはよいとしよう。では、(ii)は主観的部分であろうか。それとも客観的部分であろうか。井元が「文の意味 = 客観的な部分 + 主観的な部分」と述べたとき、「文の意味 = 命題 + その命題に対する判断」といったことを考えていたのだとすると、(ii)は主観的部分となる。しかし、これはおかしい。文(ii)は文(i)から客観的部分をそっくり差し引いたものである。すると、(ii)は 100%主観性を表すだけの文ということになってしまう

め概念を(13)のようなテーゼに掲げるメリットは何であろうか。ここではむしろ説明されるべき概念を説明に用いているのではないかいう疑念が生じる。第二に、「話し手は頭がどうかしている」といった判断は、恒真命題や矛盾命題を経なくても簡単に得られる。通りすがりの人に Je suis le successeur de Napoléon. (「私はナポレオンの後継者だ」)と言ってもよいし、通りの真ん中で空を見ながら Je t'aime. (「君のことが好きだ」)と繰り返してもよい。いずれにしても(14b-d)や(15b-d)を発話するのと同様の効果が得られるに違いない。こうした平凡な(しかし普通は生じさせようと思わない)効果をわざわざ(13)のような大げさな法則を用いて説明する必要があるとは思えない。Je suis le successeur de Napoléon.も Je t'aime. も世界について何かを語る命題を表すから、これらが表すのは(13)の言う意味での無意味な命題ではない。それにもかかわらず、これらの文は(13)が述べているのと同様の強い主観性を生じさせるのである。もちろん、(13)が述べているのは「無意味な命題は必ず豊かな主観性を表す」ということであって、「豊かな主観性は必ず無意味な命題によって伝達される」ということではないから、この事実が直ちに(13)に対する反例となるわけではない。しかし、(14b-d)や(15b-d)を発話したときに生じる効果と、通りすがりの人に Je suis le successeur de Napoléon. と言ったり、通りの真ん中で空を見ながら Je t'aime と繰り返したりするときに生じる効果に差がないなら、無意味な命題を表す文に対してのみ(13)を仮定する意義は大幅に減殺される。(13)は平凡な効果を得るためにわざわざ複雑な条件を要求しているのではないか。いわば(13)は、子供に電車の乗り方を尋ねられて、「3 回まわってワンと言ってからスキップしながら駅に行って逆立ちしながら切符を買えば電車に乗ることができる」と答えているに等しい。確かにそれでも電車には乗れる。しかし、そんなことをしなくても電車には乗れる。同様に、文の主観性と無意味性の間に関係はないと言うべきだろう。

次に、「話し手は頭がどうかしている」という判断を主観性の範疇に含めないことにしてみよう。すると、(14b-d)や(15b-d)は、無意味であるにもかかわらず、主観性を表さないことになる。これは、無意味であることは主観性を表すための十分条件ではなく、主観性を伝達する恒真命題とそうでない恒真命題があることを認めるということにほかならない。情報を抜けば空いたところに自動的に主観性が侵入してくるといった便利なものではないということである。このとき、(13)は次のような形に修正されなければならない。

が、実際には(ii)で嘘をつくことができることから分かるとおり、(ii)はある種の情報的価値を持っている。ということは、「文の意味 = 客観的な部分 + 主観的な部分」において、「主観的な部分」にもある種の客観性が侵入してしまうことになる。そこで今度は、(ii)を客観的部分と考えてみる。すると、「文の意味 = 文の明示的内容 + 背後に隠れた話し手の主観的判断」ということになる。主観的部分は文の背後に隠れ、(i)の事実全体を真実と判断する話し手の心の働きが「主観的部分」となるわけである。阿部が言語における主観性を強調するときに念頭に置いているのはこの意味での主観性であると思われる。しかし、この考え方はトートロジー(3a)や矛盾文(3b)に対して問題を引き起こす。トートロジーが表す恒真命題および矛盾文が表す矛盾命題は話し手の判断とは独立に真偽が決まる無意味な命題であるため、それらに関する主観的判断というものは意味をなさない。ここでは、恒真命題や矛盾命題とは別に、話し手の判断の対象となる有意味な命題を探さなければならないのである。そうした命題を文形式に基づいて自動的に決定することはできない。これはつまり、文の意味のうち「客観的部分」が自動的には決まらないということである。阿部はこの問題についてまったく無頓着であるように見える。以上から、「文の意味 = 客観的な部分 + 主観的な部分」という井元の反論の前提自体に無理があると言える。

(16) 現実を規定しないという点で無意味な命題を表し、かつ P である文は豊かな主観性を表す。

これによると、(14a)と(15a)は条件 P を満たすがゆえに豊かな主観性を表し、(14b-d)と(15b-d)は条件 P を満たさないがゆえに主観性を表さないということになる。問題は P の中身である。(14a)(15a)と(14b-d)(15b-d)の違いはどこにあるだろうか。形が違う。その通りである。それ以外に違いはあるだろうか。なさそうである。ここで、(14a)(15a)は意味が明瞭だが(14b-d)(15b-d)は意味不明である、などと言ってはいけない。今まさに問題にしているのは、同じ無意味な命題なのに、正常に理解されて主観性を伝達するものと、意味不明でまともな伝達機能を果たさないものとがあるのはなぜか、ということだからである。もしも両者の間に形の違いしかないとすると、(16)の P には文形式の指定が入り、(17)のようになる。

(17) 現実を規定しないという点で無意味な命題を表し、かつ X ÊTRE X という形式を持つ文(およびその否定文)は豊かな主観性を表す。

しかし、(17)は主観性仮説を吹き飛ばしかねない爆薬を含んでいる。「かつ」の前が完全に遊んでいるのである。第 3 節で述べたように、X ÊTRE X という形式の文(およびその否定文)が情報量ゼロであり、それゆえ現実を規定しない無意味な命題を表すというのは主観性仮説の基本テーゼである。この前提があるからこそ、この形を持つ文に対して(13)が適用されたのである。とすると、(17)は「かつ」までを取り去った(18)と同値であることになる。

(18) X ÊTRE X という形式を持つ文(およびその否定文)は豊かな主観性を表す。

こうして、テーゼ(2)は最終的に(18)のような形に落ち着く。(18)はもはやテーゼなどではなく、単にトートロジーとその否定である矛盾文が豊かな主観性を表すという観察言明に過ぎない。この論文の冒頭で「トートロジー(およびその否定である矛盾文)はしばしば強い主観性を表すことが知られている」と述べた。主観性仮説は、めぐりめぐって、この出発点に舞い戻ってしまうのである。この結論を避けるためには、(16)の条件 P として、統語形式に言及しない条件を探すしかない。そしてその条件は、(14a)(15a)が豊かな主観性を表すのに対して、(14b-d)(15b-d)のような文が豊かな主観性を表さないことを保証するものになっていなければならない。これはほとんど実行不可能なプログラムだろう。

次節では、主観性仮説は、出発点に舞い戻るだけではなく、実は出発点にさえ立てていないことを論じる。

5. 「主観性」をめぐる問題

主観性とは何か。これまでこの問いには触れずに来た。これは触れてはいけない問いだからである。ひとたびこれを問うならば、主観性仮説はまさにその名に掲げる主観性によって蝕まれていくことになる。

5.1 主観性概念の発散

これまでの議論により、(2)から出発した主観性仮説は(18)の形まで弱められるのであった。しかし実は、(18)でも強すぎるのである。この形式を持つ文でも、主観性を表すとは限らないからである。だが、そのことを論じる前に、改めて問題にするべきことがある。(2)あるいは(18)で言われている「主観性」とは何だろうか。阿部 (2008a-c)は、トートロジー

には Bally (1932/1965)が言語に現れると主張する三種類の主観性(19)が現れるのだと言う。

(19) a.「望ましさ / 望ましくなさ」判定

b.「真実性 / 非真実性」判断

c.「実現 / 非実現」祈願

この分類に基づき、「望ましくなさ」判定が現れているのが(1a)、「真実性」判断が現れているのが(20)、「実現」祈願が現れているのが(21)のような文であるとされる。

(20) A: J'ai rencontré Pierre hier. (「昨日ピエールに会ったよ。」)

B: Ah bon. Il a changé? (「そうなの。変わってた?」)

A: Non, Pierre c'est toujours Pierre.

(「いや、ピエールはやっぱりピエールだったよ。」)　(藤田 1988: 19)

(21) a. Une promesse est une promesse. (「約束は約束だ。」)

b. La loi c'est la loi. (「法律は法律だ。」)

しかし、これはいかにも話ができすぎではないか。バイイが指摘した主観性の数とトートロジーに現れる主観性の数が必然的に一致するなどということがあるだろうか。「三」という数字に根拠があるならよい[15]。しかし、「言語に現れる主観性の数は三つ」などという定量的主張に根拠がないことは明らかである[16]。実際、トートロジーに現れる主観性が(19)に尽きるとは思えない。例えば、(22)は「車なんてどれも同じ」という無関心を伝達する(Cadiot and Nemo 1997, cf. 坂原 2002)。

(22) Une voiture est une voiture. (「車は車だ。」) (Cadiot and Nemo 1997: 133)

この「無関心」は(19)のどれに相当するのだろうか。一番近いのは「望ましさ/望ましくなさ」

---

[15] Wittgenstein (1922)による命題の三分類(4)においては「三」という数字に根拠がある。なぜなら、ここでは、命題の真理値に「真」「偽」の二つがあることを前提として、「常に真である命題」「常に偽である命題」「それ以外の命題」のように消去法を用いて分類が行われているからである。

[16] 阿部がバイイによる主観性の分類(19)とトートロジーに現れる主観性を無理やり対応させようとしていることは「真実性」に関する阿部の説明からも見て取れる。バイイが真実性判断ということで意図していたのは Je crois qu'il pleut. (「私は雨が降っていると思う」)といった例に見られる命題の真偽判断である。これは非常に分かりやすいものである。ところが、(20)のようなトートロジーX ÊTRE X (「X は X だ」)の用法に関する阿部 (2008b)の説明は次のように大変分かりにくいものである。

(i) 「[...]ここでも主観性の関与が想定されなければならないが、その主観性は「望ましさ」ではなく「真実性」の方である。X が確として存在することは揺るぎない事実であり、X が「真実性」において程度差のある各メンバーに分解し、X 自体が解消してしまうようなことはない、ということを主張するのである。」(阿部 2009b: 216)

ここでは、「程度差」「分解」「解消」など、およそバイイが使ったとは思えない概念が密輸入されており、バイイの「真実性」がそのまま現れているとは到底考えられない。また、こうした密輸入により、分かりやすかったはずのバイイの真実性の概念が大変分かりにくいものになっている。(i)は阿部がトートロジーに現れる「真実性」概念を説明しようとしている箇所であるが、真実性を説明するのに再び「真実性」という言葉が用いられており、決して真実性概念の理解に到達できないようにできている。こうした事情を考えると、バイイの主観性分析と阿部のトートロジー分析との間にあるとされる対応関係は、阿部が意図的に捏造したものでないとするならば、阿部がその対応関係についての「真実性」判断を誤ったために見てしまった幻影であろう。これはどう見ても「望ましくない」事態である。

判定であろうが、(22)の話者は、そもそもどの車であれ、それが望ましいとか望ましくないとかいうこと自体に関心がないのであり、これを「望ましさ/望ましくなさ」判定などと呼ぶのは、外からの解釈の押し付けでしかない。(22)を主観性概念で記述しようとするなら、「無関心」という新たな主観性カテゴリーを立てる以外にない。また、トートロジーには「説明拒否」と呼ばれる用法がある (藤田 1988、坂原 2002)。

(23) A: Papa, qu'est-ce que c'est, une femme fatale ? (「お父さん、魔性の女って何?」)
B: Bah ! Une femme fatale, c'est une femme fatale. (「魔性の女は魔性の女さ。」)
(藤田 1988: 16, 26)

これを無関心と呼ぶことはできない。B は femme fatale に強い関心を持ちながらも、それについて子供に説明するべきではないと考えているだけかもしれないからである。また、ここでは femme fatale についての望ましさ判定や真実性判断や実現祈願などは一切関係ない。そこで、(23)に対しても主観性概念を用いるなら、「説明拒否」という新たな主観性カテゴリーを立てる以外にない。さらに、トートロジーには、フィクションにおける役の割り当てを述べる用法がある (藤田 1988)。

(24) Dans ce film, Hitchcock est Hitchcock.
(「この映画ではヒッチコックはヒッチコックだ」) (藤田 1988: 16)

ここではヒッチコックの「望ましさ」は一切関係ない。また、フィクションにおける役の割り当て述べているのであるから、「真実性」とは正反対である。言うまでもなく、これは「実現」祈願などではなく、監督による実際のキャスティングの取り決めを述べている。「無関心」や「説明拒否」に至っては、ここでは見当違いでしかない。そこで、「フィクションにおける役の割り当て」なる主観性を導入する以外にない。しかし、それは主観性でも何でもない。ヒッチコックがヒッチコックの役を演じる。これのどこに主観性があるだろうか。ところが、(2)あるいは(18)を受け入れる限り、(24)は主観性を表さなければならないのである。

ここで阿部がしばしば持ち出す奇怪な「論法」がある。それは、主観性は言語表現の中に潜在的には常に存在するが、同じ表現であっても、それが顕在化してくる場合とそうでない場合とがある、という「論法」である。これによると、(24)はトートロジーの中でも主観性が(存在はするが)顕在化しない場合である、などと言い逃れができることになる。これはほとんど問題にするに値しない「論法」であるが、阿部によって繰り返し用いられている以上、これを片付けておくのが得策だろう。

まず、主観性が潜在的には存在するが顕在化しない、とはどういうことだろうか。「主観性が顕在化しない」とは「主観性が感じられない」ということであろう。「感じられない主観性」が「潜在的には存在する」とはどういうことだろうか。これは端的に意味不明である。「誰にも見られない木」が存在するというのは分かる。しかし、「誰にも感じられない痛み」や「誰にも感じられない怒り」が存在するというのは意味不明である。痛み/怒りは感じる人がいてこそ痛み/怒りであり、痛みや怒りが人間の感覚や感情とは独立に宙に浮いているわけではない[17]。野矢 (1999: 83, 2010: 99)が言うように、「感じられなくなったならば、感覚はただ消え去るしかない。おせっかいな医者が私の感じていない痛みを発見し、『あなたは感じていないようだけど、首筋にひどい痛みがある』と言われても、私にはなんのことや

[17] ここは野矢 (1995: 120)の議論を参考にしている。

ら分からない。」主観性も感覚ないし感情の一種である以上、「感じられないが存在する」というのはナンセンスである。そこで、「(24)は主観性が潜在的には存在するが顕在化していない」というのはナンセンスであり、これは単に「(24)は主観性を表さない」ということにほかならない[18]。しかし、(2)や(18)が正しければ、(24)は必ず主観性を表すはずなのである。

(24)が主観性を表さないのはおかしいのではないか、という批判に対して、阿部（個人談話)はしばしば次のような応答をする[19]。「同じ形式の表現が常に同じ程度の主観性を表すというのは構造主義的な考え方である。そうでない立場からすれば、一方の極に強い主観性を表す場合があり、他方の極に主観性が感じられない場合があり、それらが連続体をなしていると考えることができる。」この応答は批判の意味を履き違えている。上で、(2)あるいは(18)を受け入れる限り、(24)は主観性を表さなければならないと述べた。阿部はこの「表さなければならない」を他の立場（阿部によると、構造主義者)からの要求と捉えている。例えば、ラグビー選手がサッカー選手に「どうして手を使わないんだ。勝ちたければ手を使わなければならない。」などと批判するのと同じだと捉えている。ラグビーとサッカーとではルールが違う以上、この批判は他人の土俵を荒らす行為でしかない。しかし、上記の批判の図式はこれとはまったく異なる。「(2)あるいは(18)を受け入れる限り、(24)は主観性を表さなければならない」というのは、他の立場からの要求などではなく、阿部の理論の整合性を保つための論理的必然性を述べたものである。いわば、「サッカーをするためには、ボールがなければならない」と言う場合の「なければならない」なのである。ボールがなければ、サッカーは成立しない。(2)や(18)を主張しつつ、(24)は主観性を表さないと主張するのは、サッカーをすると主張しつつ、ボールは使わないと主張するようなものである。そこにおいて批判者がどの立場に立っているかはまったく関係ない。批判者は阿部の土俵に立って阿部の理論に内的整合性が欠如していることを指摘しているに過ぎない。阿部に残された道は、(2)や(18)のテーゼを大幅に弱めるか、(24)を含めてすべてのトートロジーが何らかの主観性を表すと主張するか、のいずれかしかしかない。繰り返すが、これは阿部の理論自体が内側に抱える問題であり、批判者の立場は一切関係ない。批判者がいなくても、阿部の理論は自滅する構造になっているのである[20]。

まず、(24)を含めてすべてのトートロジーが何らかの主観性を表すと仮定してみよう。すると、例えば(23)は「説明拒否」という主観性を表し、(24)は「フィクションにおける役の

---

[18] 「潜在的には存在するが顕在化しない」を、「話者は主観性を込めたつもりだが、聞き手にそれが伝わりにくい」と解釈することも考えられる。この観点からすると、テーゼ(2)は「文の情報量を減らしてやると、情報が減った分、話し手の込めた主観性が聞き手に伝わりやすくなる」といった内容を表していることになる。しかし、これがまったく成り立たないことは明白である。例えば、いくら「猫なんてみんな似たり寄ったりだ」という主観性判断を込めて(14b-d)を発話しても、聞き手にその判断が伝わりやすくなりはしない。

[19] これ以下は阿部の応答の要約であり、阿部が用いた表現の忠実な再現ではない。

[20] こうした批判に対して、阿部（個人談話)はしばしば「批判者との間に接点が見いだせないため、批判に答えられない」という趣旨のことを述べる。しかし、この応答も的外れである。批判者との間に接点を見いだす必要などない。サッカーをしたい。しかしボールはない。この時点で阿部にサッカーができないことは確定するのであり、ここでわざわざラグビー選手との接点を見いだす必要はない。それでもなお「ラグビー選手との接点が見いだせないため、自分にサッカーができるかどうか分からない」と言うサッカー選手がいれば、そのサッカー選手は実はサッカーの規則すら理解していないと考えるべきである。

割り当て」という主観性を表すことになる。一見して明らかなように、これは観察された意味に「主観性」というラベルを貼り付けているに過ぎない。このやり方は二つの問題を引き起こす。第一に、このやり方が許されるのであれば、どんな意味が観察されようとも、それを「主観性」と呼ぶことが許されてしまい、(18)は自動的に検証されることになる。このやり方では、(18)を反証する手段が原理的に奪われてしまうのである。これは(18)が理論的にナンセンスな言明となることを意味する。第二に、このやり方で行くならば、別にトートロジーでなくとも、ありとあらゆる言語表現が主観性を表すことになる。「今日私は朝7時に起きた」は過去の事実の報告という主観性を表し、「明日私は朝7時に起きる」は未来の事実の決意という主観性を表し、「あそこにいるの太郎だよね」は現在の事実の確認という主観性を表す、などなど。実際、阿部 (2008a: 213)は「言語現象の基盤に常に[...]主観性があ」ることを強調している。しかし、言語表現に主観性が必ず存在するならば、主観性が表される条件を述べた(2)や(18)は不要ではないか。言語表現のあるところに必ず主観性がある以上、特定の言語表現に主観性があることは自明であり、指摘するに値しないのではないか。阿部の研究は、要するに、動物園に行って「そこにも動物がいる。あそこにも動物がいる。」と言っているような研究ではないか。子供が言えばかわいらしいが、動物学者が言えば、かわいらしくないだけでなく、学者としての責任を果たしていない。

以上の議論から、やはり(23)や(24)は主観性を表さないと言うべきだろう。(23)や(24)が表す意味は(1a)のようなトートロジーが表す主観性と同じものではありえない。これは(2)を単なる記述に格下げした(18)でもなお強すぎることを示している。主観性仮説は依然として観察事実についての出発点にすら立てていなかったのである。残された道は、(18)に手を加えて、トートロジーが主観性を表す条件を絞り込むことである。次節ではこれが主観性仮説の自滅を招くことを論じる。

5.2 主観性概念の制限と主観性仮説の終焉

(23)や(24)の表す意味に「主観性」のラベルを貼ることを断念し、主観性の種類を制限するならば、(18)は一般的には成り立たなくなる。そこで、X ÊTRE X という形式を持つ文(およびその否定文)がどんな場合に主観性を表すのかが問われなければならない。これは、(18)が次の形に変換されることを意味する。

(25) X ÊTRE X という形式を持つ文 (およびその否定文)は、Q である場合に、豊かな主観性を表す。

(1a)は条件 Q を満たすがゆえに豊かな主観性を帯びるが、(23)や(24)は条件 Q を満たさないがゆえに主観性を表さない、と考えるのである。

問題は条件 Q の中身である。(1a)と(23-24)が X ÊTRE X という形式を共有している以上、それらの解釈の違いは発話文脈の違いに帰せられるしかないだろう。実際、(24)は文脈によっては「ヒッチコックはいつもヒッチコックらしい立派な演技をする」といった強い主観性を伴う意味を表すことがある。その意味で、(25)における条件 Q を求めるとは、X ÊTRE X がいかなる文脈でいかなる意味を表すかを研究することにほかならない。ここでは詳細に立ち入らないが、条件 Q の正体については藤田 (1988)にさかのぼる論考がある[21]。こう

[21] 藤田 (1988)は本格的なトートロジー研究の端緒を開いた記念碑的研究であるが、藤田に

して、主観性仮説はようやく他のトートロジー論と問題意識を共有できたことになる。それと同時に、主観性仮説は独立の存在意義を失い、他の理論に吸収されることになる。

時系列で言えば、主観性仮説はトートロジー論の中でも最も新しいものに属するが、その中身はラディカル意味論 (Wierzbicka 1987)と変わらない水準にある。ラディカル意味論とは、トートロジーがある種の主観性を表すという事実を説明の対象とせず、そのまま原始的事実として受け入れ、辞書に記載しようとする「理論」である。ラディカル意味論は一種の敗北主義であり、言語事実の理解に何ら貢献しない。主観性仮説の不可解な点は、(i) 文脈を考慮に入れずトートロジーの意味効果をトートロジー自体の統語的ないし意味的性質のみに帰する点、(ii) トートロジーの表す多様な意味のうち、主観的な側面のみを強調する点、の二点に求められる。この二つの点を足し合わせてできたのが(2)のような擬似テーゼであったと言える。(2)とは、結局のところ、「X ÊTRE X という形式を持つ文が主観性を表す場合がある」という自明の事実を、理論的言明の体裁を繕いつつ述べた内容空虚な擬似テーゼに過ぎない。一方に「X ÊTRE X は情報量ゼロの文ないし無意味な文である」という事実 (これを A とする)があり、他方に「X ÊTRE X は豊かな主観性を表す」という事実 (これを B とする)があり、本来独立であるはずのこれらの事実の間に因果関係を捏造し、「A であるがゆえに B である」と述べたのがテーゼ(2)なのである。この捏造を助けたのは「情報を減らせば、空いた隙間に主観性が侵入してくる」といった容器と内容物のスキーマである。「ジュースを飲めば、ジュースが減った分だけ缶に空気が侵入する」といった安直なイメージが何の反省もなくそのまま言語の分析に適用されてしまったのである。このことを正しく認識すれば、(2)が、一見何かを説明しようとする理論的言明のように見えながら、実はラディカル意味論ばりの敗北宣言に過ぎないことは明白である。この意味で、主観性仮説はトートロジー研究を 20 年以上後退させる非生産的プログラムであると言える。

6. 結論

この論文では、主観性仮説を支えるテーゼ(2)を維持するためにいかなる条件が必要であるか、およびその条件が満たされなければいかなる事態が生じるかについて論じた。主要な論点をまとめてみよう。

よる条件 Q の探求は重大な論理的誤謬に基づいている。ここでは論じないが、藤田の理論も、主観性仮説と同様、一度徹底的に破壊してから作り直す必要がある。なお、近年、藤田 (個人談話)は、論理構造に基づく批判は言語学的研究に対する批判としては説得力を持たないという趣旨の発言を行っている。これは論理(学)とは完全に独立に言語(学)を研究することができるという奇妙な独断に基づいた意味不明な弁明でしかない。「論理を主題としない言語研究」はいくらでもあってよいが、「論理に基づかない言語研究」は、「ルールのない野球」と同じく、存在しえない。研究者が意識しているはどうかに関わらず、言語研究、さらには、あらゆる人間の活動は何らかの論理の内側で行われるほかはない。たとえ当人が意識していなくても、その活動において論理は「示される」のである (Wittgenstein 1922 cf. 野矢 2002/2006)。したがって、言語学的研究が論理的不整合を抱えていることが判明すれば、その研究は無効なものと判断されてよい。こうした批判に対してなお「言語(学)と論理(学)は別だ」と応じるなら、それはもはや学問的主張ではなく、論理(学)への鈍感さないしは敵意に基づいた単なる言語(学)原理主義である。藤田 (1988)の誤謬については機会を改めて論じることにしたい。

A. (2)を維持するためには、省略文を含むすべての文に適用可能な情報量の測定基準を作らなければならない。その基準は、形態論的・統語論的条件に言及してはならない。それができないなら、省略文は(2)の適用対象外となる。

B. (2)を維持するためには、矛盾文の情報量がゼロであると言えるような情報量の理論を作らなければならない。その理論は(8-9)を反証するものでなければならない。それができないなら、(2)は(13)の形に弱められる。

C. (2)(あるいは(2)を弱めた(13))を維持するためには、恒真命題または矛盾命題を表す文がすべて豊かな主観性を伝達するわけではないという事実に説明を与えなければならない。すなわち、これらの文が豊かな主観性を伝達するための十分条件を定式化しなければならない。その十分条件はそれらの文の統語形式への言及を含んでいてはならない。それができないなら、(13)の形に弱められた(2)はさらに(18)の形に弱められる。

D. (2)(あるいはそれを弱めた(13)または(18))を維持するためには、X ÊTRE X / X n'est pas X という形式のトートロジー・矛盾文に限っても、それらが常に主観性を表すわけではないという事実に説明を与えなければならない。すなわち、これらの文が主観性を伝達するための十分条件を定式化しなければならない。これは(25)の条件 Q の内容を探り当てることに等しいが、条件 Q に文脈情報を含めてしまうと、主観性仮説は、結局、藤田 (1988)らの他のトートロジー論の出発点と何ら違いがないものとなる。

おそらく、A-D に見られる厳しい要求を満たすことは不可能だろう。テーゼ(2)が大幅に弱められ、最終的に主観性仮説が解消されてしまうことは避けられないと思われる。

誤解の生じやすいところなので強調しておきたいが、私は決して「トートロジーは主観性を表さない」などと主張しているのではない。「トートロジーは豊かな主観性を伝達するための手段となりうる」という観察自体に問題にすべき点はない。この点で私の立場は阿部をはじめとする主観性仮説の支持者と何ら変わるところはない。彼らに反して主張したいのは、「トートロジーの主観性の源泉は情報量の欠如ではない」という、ただ一点のみである。この論文の主張はこのようなほんのささやかなものに過ぎない。しかしながら、このほんのささやかな事実を忘れ、トートロジーの主観性の源泉を情報量の欠如に求めたくなる誘惑に屈するならば、とたんに A-D のような難題と向き合う羽目になり、甚だしく理論的センスを欠いた仮説修正を繰り返しつつ、最後は自滅することになる。(2)の主張が A-D の問題を必然的に伴う以上、(2)のテーゼを主張し、かつ A-D の問題から目をそらすのは矛盾した態度である。5.1 においても強調したように、こうした論点は批判者の理論的立場とは一切関係ない。A-D は主観性仮説を支持する者自らが招き寄せる問題なのである。これらの問題から目をそらし、論じるべきことを論じず、ひたすら(2)のテーゼを繰り返すのは、単なるシュプレヒコールの類であり、まっとうな学問的議論の仕方ではない。

阿部は言うかもしれない。主観性仮説の眼目は、(2)のような仕組みを理論的に厳密に述べることにあるのではなく、普段は言語表現の陰に隠れている「望ましさ」などの主観性が言語表現の解釈において重要な働きする場合があることを明るみに出すことにあるのだ、と。実際、阿部はこのような発言をことあるごとに行っている。しかし、もしもこれが主観性仮説を提唱した動機であるならば、主観性仮説は最初の一手から間違っていたというほかない。5.1 で見たように、阿部は、(2)のようなテーゼを、潜在的には常に存在する主

観性がいつ顕在化するかを述べたものであると捉えていた。トートロジーに限らず、阿部は、普段は目立たない主観性が前面に出ているように見える表現の収集と分類に熱心である。主観性に関する阿部の研究はほぼその作業で尽くされていると言ってよい。しかし、常に存在するとされるものについて、「あ、こんなところにもあった」と言うことに何の意味があるのか。そこら中にある以上、それが前面に出ているかどうかなど、瑣末な問題に過ぎないのではないか。それは、人間によって空気の存在が強く意識される条件を研究することにさほど意味がないのと同じことである。「空気は普段の生活ではその存在が意識されることはないが、実はとても重要なものであり、それがある種の場合に強く意識される」などと言われても、当然過ぎて何のありがたみもない。おそらく、主観性仮説に対して誰からも反論が提出されないのはこの当然さゆえであろう。しかし、この当然さが(A-D のような問題に目をつぶるとしても)ありがたみのなさと抱き合わせであることを忘れてはならない。主観性仮説によって我々が蒙を啓かれることはないのである。そのような仮説をわざわざ提唱し続ける意味はない。主観性仮説とは、取り組む必要のない問いに取り組むことによって捏造された擬似仮説に過ぎないのである。

言語学者が行うべきことは、そもそも(1a)のように主観性を表す表現がまったくないところに強い主観性が生じる条件を明らかにすることである。これは空気の発生条件を研究することに相当する。「(あると分かっているものが)いつ顕在化するか」ではなく、「(ないはずのところから)いかにして発生するか」を研究するべきなのである。空気の発生条件を調べることは生命誕生の条件を解明することにつながる可能性がある。同様に、主観性が言語の不可分の要素であるならば、主観性が生まれる条件を研究することは、言語が生まれる条件を明らかにしてくれる可能性がある[22]。

こうして我々は主観性仮説が仕掛けた迷路から抜け出すことができる。トートロジーの主観性の源泉は何か。ようやくこの問いの正しい意味に立ち戻ることができた。これこそがこの論文の目指した地点にほかならない。もはや、主観性仮説に惑わされてはならない。

付記

本研究は科学研究費補助金 (若手研究 (B)、研究代表者: 酒井智宏、課題番号: 22720149「意味排除主義と自然言語の規範性に関する研究」)の助成を受けている。

参考文献

阿部 宏 (2006a)「トートロジーについて」 日本フランス語学会第 231 回例会口頭発表、東京大学.

阿部 宏 (2006b)「フランス語の心の声 1」『ふらんす』(白水社) 2006 年 8 月号、18-19.

阿部 宏 (2007)「トートロジーと主観性」 日本認知言語学第 8 回大会口頭発表、成蹊大学.

阿部 宏 (2008a)「シャルル・バイイの一節をめぐって - au moins, du moins, encore moins と主観性-」日本フランス語学会第 246 回例会、慶応義塾大学.

[22] この問題に関しては、他者との意見の不一致が放置可能とみなされるような実践のあり方が主観性概念の源泉であるとする野矢 (1995)、感情と言語(論理)は相反するものではなく、感情こそが言語(論理)を駆動するものであるとする山口 (2009)の研究が重要な示唆を与える。野矢 (1995)の考え方を矛盾文の分析に応用したものとして酒井 (2009)がある。

阿部 宏 (2008b)「トートロジーと主観性について」『日本認知言語学会論文集』8: 212-222.

阿部 宏 (2008c)「日本語における「望ましさ」概念について」 *Proceedings of the International Conference in Japanese Studies; Civilisation of evolution. Civilisation of revolution. Metamorphoses in Japan 1900-2000*, Jagiellonian University, Krakow, Poland 2008.

阿部 宏 (2009)「主観性と文法化・無意味文・省略文」日本フランス語学会シンポジウム口頭発表配布資料.

Abe, Hiroshi (2009) Étude contrastive japono-française sur la "désirabilité" フランス認知言語学会第 3 回国際大会口頭発表配布資料.

Bally, Charles (1932/1965) *Linguistique générale et linguistique française*, Berne: Edition Francke.

Cadiot, Pierre and François Nemo (1997) Analytique des doubles caractérisations, *Sémiotiques* 13 : 123-143.

Carston, Robyn (2004) Relevance theory and the saying / implicating distinction, In: Laurence R Horn and Gregory Ward. (eds.) *The handbook of pragmatics*, 633-656. Oxford: Blackwell.

藤田 知子 (1988)「Une femme est une femme —X ÊTRE X 構文解釈の試み」『フランス語学研究』(日本フランス語学会) 22: 15-34.

髭 郁彦・川島 浩一郎・渡邊 淳也 (2009) 『フランス語学概論』東京: 駿河台出版社.

三宅 鴻 (1972)『英語学と言語学 前編』東京: 三省堂.

野矢 茂樹 (1995)『心と他者』勁草書房.

野矢 茂樹 (1999/2010)『哲学・航海日誌』東京: 春秋社、1999 年、東京: 中公文庫、2010 年.

野矢 茂樹 (2002/2006)『ウィトゲンシュタイン『論理哲学論考』を読む』東京: 哲学書房、2002 年、東京: ちくま学芸文庫、2006 年.

Recanati, François (2004) *Literal meaning*, Cambridge: Cambridge University Press, 今井邦彦(訳)『ことばの意味とは何か—字義主義からコンテクスト主義へ』東京: 新曜社、2006.

坂原 茂 (2002)「トートロジとカテゴリ化のダイナミズム」大堀壽夫(編) 『シリーズ言語科学 3 認知言語学 II: カテゴリー化』東京: 東京大学出版会: 105-134.

Sakai, Tomohiro (2009) Le débat entre littéralisme et contextualisme: le Cas des énoncés tautologiques du type *X ÊTRE X*." 『フランス語学研究』第 43 号: 1-18.

酒井 智宏 (2009)「矛盾文における規範性」日本フランス語フランス文学会 2009 年度秋季大会配布資料.

滝浦 真人 (2005)『日本の敬語論 — ポライトネス理論からの再検討』東京: 大修館書店.

戸田山 和久 (2005)『科学哲学の冒険: サイエンスの目的と方法をさぐる』東京: NHK ブックス.

Wierzbicka, Anna (1987) Boys will be boys: 'Radical semantics' vs 'Radical pragmatics', *Language* 63: 95-114.

Wittgenstein, Ludwig (1922) *Tractatus Logico-Philosophicus*, Routledge & Kegan Paul, 野矢茂樹(訳)『論理哲学論考』東京: 岩波文庫、2003 年.

Wittgenstein, Ludwig. (1961) *Notebooks 1914-1916*, Basil Blackwell, 奥雅博(訳)「草稿 1914-1916」『ウィトゲンシュタイン全集 1』東京: 大修館書店.

山口 裕之 (2009)『認知哲学: 心と脳のエピステモロジー』東京: 新曜社.
山梨 正明 (1995)『認知文法論』東京: ひつじ書房.

What is not the source of subjectivity in tautology

SAKAI Tomohiro

Key-words: tautology, subjectivity, quantity of information

Abstract

The purpose of this paper is to demolish the subjectivity-based approach to tautologies. According to this approach, the degree of subjectivity expressed by a sentence is inverse proportional to the quantity of information conveyed by the sentence, which is supposed to account for the high degree of subjectivity that tautologies often exhibit. It is shown that this thesis raises various puzzles of linguistic or philosophical nature and that every attempt to modify the thesis so that these puzzles can be shunned eventually leads to the dissolution of the subjectivity-based approach itself.

(さかい・ともひろ　東京大学大学院学術研究員)